

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	蘇 振 軍
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">日本語母語話者と学習者による定式表現の処理 —意味的透明性に着目して—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 畑佐 由紀子</p> <p>審査委員 教授 白川 博 之</p> <p>審査委員 教授 宮谷 真 人</p> <p>審査委員 准教授 金 愛 蘭</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>第二言語（以下、L2）学習者は上級者であっても、文法的には正しいが、目標言語としては不自然な表現を産出することが少なくない。これは学習者が語彙と文法知識を用いて構築可能な文を産出するのに対し、母語話者はその一部の語の固まりを場面や文脈に応じて繰り返して使用することが一因だと考えられている。この母語話者が繰り返して使用する語の固まりは定式表現 (formulaic language) と呼ばれている。定式表現の役割や特徴については近年英語を対象として様々な検討がなされており、L2を対象とした研究でも、定式表現が学習者のL2の自然さ、流暢さ及び適切さに影響する可能性が指摘されている。日本語を対象とした記述研究の結果から、日本語にも定式表現が数多く存在しており、日本語の産出に大きな役割を担っている可能性があり、日本語教育の分野への応用に貢献できると考えられる。しかし、日本語では欧米でなされているような大規模コーパスを用いて定式表現の形態的・機能的特徴を探る研究や定式表現がどのように処理されるかを探る研究は極めて少ない。</p> <p>そこで、本研究では、日本語定式表現の基礎研究として、定式表現が母語話者と日本語学習者の句・文処理と産出を促進するか、定式表現の種類によって処理が異なるか、母語話者と学習者の間に相違があるかを検討することを目的とした。これにより、定式表現がどのように母語話者と学習者の心内辞書に貯蔵されているかを探り、先行研究で示された結果が日本語にも当てはまるかを、以下の課題を設定し検討した。</p> <p>(1) 母語話者と学習者は定式表現を統制句より容易に処理するか、意味的透明性は句の処理に影響を与えるか、母語話者と学習者の間に相違があるか。</p> <p>(2) 母語話者と学習者において、定式表現は文の処理を促進するか、意味的透明性は文処理に影響を与えるか、母語話者と学習者の間に相違があるか。</p> <p>(3) 母語話者と学習者が定式表現をどのように産出するか、自由結合より容易にかつ、速く再生するか、意味的透明性はその再生に影響を与えるか、母語話者と学習者の間に相違があるか。</p> <p>本論文は、6章で構成される。第1章では研究の背景と目的を述べ、第2章では、定式表現に関する定義や分類、研究アプローチを概観した上で、本研究の課題を提示した。</p>			

第3章では、定式表現が母語話者と学習者の言語処理を促進するかを検討するため、句単位の読み上げ課題を用いて実験を行った。その結果、母語話者、学習者ともに定式表現を統制句より速く処理していた。定式表現の意味的透明性が処理に影響を与え、母語話者、学習者ともに、意味的透明性の高い定式表現のほうを意味的透明性の低い定式表現より速く処理していた。そして、全ての項目において母語話者は学習者より処理速度が速かった。

第4章では、定式表現が文処理に与える影響について、文単位の読み上げ課題を用いて実験した。その結果、母語話者、学習者ともに、定式表現を含む文のほうを、統制文より速く処理していた。定式表現の意味的透明性は、母語話者の文処理に影響を与えなかったのに対し、学習者の文処理に影響を与え、意味的透明性の高い定式表現文のほうが、意味的透明性の低い定式表現文より速く処理されていた。また、母語話者は学習者より文を速く処理していた。

第5章では、定式表現が母語話者と学習者の言語産出に与える影響について、口頭再生課題を用いて実験した。母語話者、学習者ともに、定式表現と統制句の間に再生成績には差がなかったが、学習者は共起関係に関する不十分な知識を用いて語と語を組み合わせて日本語を産出していたため、再生率が低かった。また、再生時間の分析では、母語話者、学習者ともに、定式表現を統制句より速く再生していた。定式表現の意味的透明性は母語話者の再生に影響を与え、意味的透明性の高い定式表現のほうが意味的透明性の低い定式表現より速く再生されていたのに対し、学習者の再生に影響を与えず、意味的透明性の高低の間に再生時間の差がなかった。

第6章では、第3, 4, 5章の実験結果をまとめ、総合考察を行った。いずれの実験においても、母語話者、学習者ともに、定式表現が言語の処理と産出を促進すること、母語話者は学習者よりも全ての刺激を速く処理していたことがわかった。また、母語話者は基本的に定式表現を固まりとして処理しているが、意味的透明性が低く、構成語の意味と定式表現の意味が異なる場合、処理が妨げられることがわかった。これは、二重経路モデルを支持するものであった。一方、学習者は、意味的透明性の高い定式表現のほうを、意味的透明性の低い定式表現より速く処理していたが、口頭再生課題では、再生率が低く、流暢に再生できないものが多かった。これらのことから、学習者にとって、定式表現は母語話者のように固まりで処理されているとは言えず、定式表現も統語処理されている可能性が示唆された。

本研究は、定式表現が母語話者と学習者にどのように処理されるかについて初めて日本語を対象としてなされた研究である。心理学的見地に基づく定式表現研究は印欧語の研究成果をもとに理論化されているため、日本語のように言語体系が著しく異なる言語での検討は、日本語のみならず、定式表現の処理における普遍性と可変性についての重要な情報を提供できる。また、本研究は、句単位処理、文単位処理、そして、産出といったこれまで個別になされていた研究を総合的に検討しており、知覚と生成の両側面から定式表現の処理を検討した点でも新規性に富む。以上、本研究は、日本語の定式表現の先駆的研究であり、定式表現の処理理論に重要な示唆をもたらす研究である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。